

氏名（本籍）	チャン フォン アドリアナ シルビア Chang Fon Adriana Silvia [ペルー]
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	乙第 8 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 35 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	ペルーの工芸発展のための持続可能(サステナブル)な材料とデザイン介入に関する研究
論文審査委員	主 査 教 授 服 部 等 作 副 査 准教授 加治屋 健 司 副 査 教 授 関 村 誠

論文内容の要旨

本論文は、ペルーの手工芸産業へのデザイン介入の可能性について調査し、サステナブルな地域資源の使用及びサステナブルな製造の実践を促し、同時にペルーの文化及び歴史的遺産を保護しつつ、環境に与える影響を最小限に抑え、且つペルーの工芸成長市場に利益を与える方法を考えることを目的とする。前述のことはデザイナーとペルーの手工芸職人の交流により、また製造技術及び美学概念において日本とペルーが持つ知識を調査することにより可能になると予測される。

第一章では、本論文の基礎となった背景の枠組みを示し、動機及び主な特徴を説明する。まず、サステナビリティの概念について説明し、環境問題を解決するためにはどのようにしたらよいか、社会的・経済的・環境的・文化的諸要素が公平に扱われるサステナブルな開発においてよりよいシステムを築き上げるにはどのようにしたらよいかを述べる。次に、デザインの分野において、この概念を、「揺りかごから墓場まで」と呼べるものを含む、様々なサステイナブル・デザイン案として実現される。ここでは製品のライフサイクル、適切な製造工程の使用、および生態系に有益な材料の使用に関する分析を目的としている。したがって、NWFPのような再生可能材料を使用する必要性とその役割、そしてそれらがサステナブルな発展を実現する可能性について議論する。ここでの焦点は、主に竹である。ペルーにも竹は存在しているが、その使用や需要はまだ低い。特に工芸の分野においては、竹の多用途性や適切な技術についての知識がないために、最低限の利用にとどまっている。

第二章では、日本とペルーの美的概念や伝統的な工芸技術、再生可能材料の利

用方法を通して、文化をサステナブルな製造の柱として説明する。これが、本研究のサステナブル・アプローチの中核をなす。文化のアイデンティティや伝統を保つという目的のためには、技術を応用することで確実に責任を果たすデザインとそれにふさわしい製造方法を用いていく必要がある。そのためには、工芸や伝統的技術、新しい製造方法や材料の導入において適切な技術を利用することに意義があることも指摘している。

第三章では、サステナビリティに関してペルーの工芸のコミュニティが抱える特別な問題に焦点をあて、デザインの介入及びその方法論の必要性を説明する。ここで、「サステナブルな概念に基づいたデザインの介入により、ペルーの手工芸産業において再生可能材料の使用、文化的アイデンティティの保存をどのように誘導できるか」という本研究の中心的な問題を提起し、その問題に対する仮説、目的、デザイン案を提示する。仮説では、(日本及びペルーの技術・美的概念における)サステナブルな概念において、どのようなデザイン手法や要素がペルーの手工芸分野の発展の一助となるかを説明し、ペルーの特定のコミュニティにおけるサステナビリティの実現を可能にする現代的工芸品のデザイン案を提示する。

第四章では、日本とペルーの工芸技術における試験的実践、及びペルーの工芸職人との共同製作の体験について述べ、本論文の論点に対する答えとなる以下の問いへの答えを探る。「どのような技術がペルーのマーケットの現代的ニーズに合うか。そして、サステナビリティ実現のためには、どのような伝統技術を製品の製造に使えばよいのか。」ここで、日本の竹の生産地(別府、熊本、竹原、山口)、ペルーの手工芸コミュニティ(Moche, Túcume, Lima)への数々の研修旅行、および本大学の漆ワークショップでの実践において行った研究に基づき、竹、瓢箪、藁、竹積層材(Plybamboo)、日本の漆を使用したデザイン作品を示す。これらの材料に用いられる技術、特に竹については、ペルー政府が竹という材料を促進しており、また、ペルーの職人の間でも類似の材料を使用して製品を作る能力が認められているため、ペルーの工芸産業を改善していくために問題なく取り入れることができる適切な技術と思われる。

そして最後に最大の論点「サステナブルな概念に基づいたデザイン介入により、ペルーの手工芸産業において再生可能材料の使用、文化的アイデンティティの保存をどのように誘導できるか」への答えを述べる。筆者は、責任ある観光の枠組みの中で手工芸の改善を目的とした計画を立て、そこにデザイン介入を行った。この計画は、地域のコミュニティと民間団体が専門家グループの支援・指導により相互利益を得るもので、民間団体を補足的事業の促進者とするすることで、ペルーの農村地域のサステナビリティの達成及び文化的アイデンティティの保護を目指すものである。この計画は民間団体と地域コミュニティ間の(経済的、人的、サステナブルな)総合開発のための商業的・戦略的な提携で、対象コミュニティ、そこに住む人々の生活の質、地域の観光事業及びインフラに利益をもたらす、サ

ステナブルな特徴を持った新しい製品・サービスを発展させることを目的としたものである。この計画により、デザイン介入、及びサステナブルな材料（竹、茎、天然繊維等、まだその可能性が十分に活かされていないもの）を使用・加工する新技術・手法を導入することで、新製品・サービスの発展を目指した地域の生産ネットワークが創出され、活動が多様化し、収益が増加するとの予測を行った。

バングラデッシュにおいて現地の工芸職人や民間企業と協力して行った現代工芸開発プロジェクトは、ペルー・プロジェクト同様、技術援助を行い工芸品を他の市場に導入することができる大企業との連携のもと、伝統工芸の復活、工芸地域でのサステナブルな製造の達成、現地製品の商業化を図ることに目的があった。バングラデッシュのプロジェクトにおけるデザイン介入の効果と困難さを考察した。

第五章では、本論文において導き出された主な調査結果及び理論的貢献を通して、本研究の一般的結論を述べる。

NWFP は大きな可能性・将来性を秘めている、という結論に達するが、特に竹は、単に代替材料となり環境に有益であるだけでなく、その多用途性により、製品や半製品の製造での使用で、また、工芸においては準工業・工業レベルで、ペルー市場の立ち上げにおける革新的デザインを創出する新しい代替品としての将来性が予測できる。日本で竹に関して使われている伝統技法のほとんどがペルーに問題なく導入することができるが、その理由は、竹割り技法やかご細工等に関してはペルーにも類似材料の使用による経験があるためである。一方、漆技術等他の技術については、導入できる可能性はあるが、ペルーにある類似材料で試験を行う必要がある。これらの技術とペルーの技術（織物、瓢箪彫刻、かご細工等）を統合することにより、現在品質標準に格差があるペルーの工芸分野を改善していくための革新的なサステナブル製品を創出することができるであろう。

工芸職人に関しては、工芸品の改善を目指したデザイン技能・手法を習得してもらい、また、環境問題や新しいサステナブル案・実践に関する理解度を深めてもらうためのデザイン介入が必要である。この課題において、デザイナーは専門家や民間・公共団体のサポートを受けて重要な役割を担う。なぜなら、デザイナーはサステナブルな解決法を得るためのまとめ役として決断の際に影響力を持っているからである。従って、ペルーの工芸産業に関して言えば、デザイナーは特定の工芸コミュニティに介入し、その地域の総合的なサステナビリティを実現するために文化保護を促進する重要な役割を担っている。

また、文化的要素はサステナビリティ実現のためには欠かせないものである。文化は人間を育てるものであり、また、人間にアイデンティティ、帰属感、信仰心を与え、行動パターンを植えつけるものである。「サステナブルな社会はサステナブルな文化によって生まれる」。サステナビリティ実現に向けてよりよい行動計画を立てるためには、文化に関する問題を考慮に入れる必要がある。そして、文化の違いを理解することにより、受け入れることが可能になり物事を成し得る

ことが可能になるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ペルーの持続可能（サステナブル）な諸材料を調査し、それらを用いた工芸品にデザインを導入させ、持続可能なプロセスを通して生産することで、地域社会の持続可能性を高め、ペルーの工芸産業を発展させることを目指した研究である。第1章では、論文の基礎となる持続可能性（サステナビリティ）の概念やそれを持つ諸材料について検討し、第2章では、日本とペルーのあいだの美意識や技術を比較・検討し、第3章では、ペルーの工芸産業の状況を分析し、第4章では、日本やペルー、バングラデシュでおこなってきた現地調査やワークショップに基づいたデザインワークやプロジェクトを紹介し、第5章で、結論として、持続可能な材料やプロセスにデザイン介入を加えることでペルーの工芸を発展させることができると主張している。

著者は、数多くの文献を調査した上で持続可能性という重要な問題を論じ、豊富な現地調査やワークショップに基づいた議論を展開している。予備審査で指摘された日本の美的概念に関する記述を改め、ケーススタディーを充実させるなど、博士学位論文にふさわしい議論を展開する論文になったと判断できる。以上のことから、本申請において合格とした。